

# BOOK REVIEW

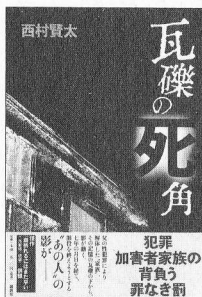
いよいよ来た。『瓦礫の死角』は著者西村賢太の五十七冊目の単著、短篇集としては十六冊目だが、処女作品集の『どうで死ぬ身の一踊り』（講談社）や近年の『芝公園六角堂跡』（文藝春秋）とならんで、記念すべき一冊となりそうだ。

何と言っても注目は表題作である。いよいよこれから「父親もの」が本格的に始まるのかと思わせる、プレリユードの予感。巷では以前からこんな囁きが漏れ聞こえていた。「西村賢太はあんな調子でやってはいるが、本当の核心は父親のことだ」「いつ父を書くのだろうか」「ほんとうに書けるのか?」「書けたらすごい」「書かなくてもいいよ。今のままでいいよ、賢太」などなど。

父親の犯罪への言及はこれまでも頻繁にあったし、野球場での父子の一コマなども描かれてはいる。しかし、この「瓦礫の死角」はちがう。

主人公は十七歳の北町貫多。仕事をクビになって居場所がなくなり、お馴染み「町田の母」の部屋に転がりこむ。親に乱暴を働か、窮すると金をせびりにくだけの息子。あきらかに迷惑がられて

## 新たな序章か？ 阿部公彦



『瓦礫の死角』  
西村賢太

いる。お馴染み「ダメ息子もの」の展開だ。ところが途中で急にトーンが変わる。

まるで真が黒々と染まっていくかのような暗黒的な気配。母親の体調が急に悪化し、これもダメ息子の居候ゆえかと早とちりしそうになるのだが、そこで告げられたのは驚くべきことだった。性犯罪で長らく刑務所に服役していた父親が出所するかもしれない、というのだ。

そのことを貫多に告げる母親は「血走った目玉をギョロギョロとさせ」、さ

群が一種の「サーガ」の趣を呈しつつある。よりはっきりとした振り返りの眼差し。作家がこれからのいつか何を語るのか、とても気になる。

その次の「病院裏に埋める」は表題作と同じ号の「群像」に同時掲載された作品だが、著者自身による「あとがき」によれば「連作風の『不』連作」だという。たしかに設定上は、かの十七歳の貫多が母親を見捨てて都心に出てきた後の話で、続き物だ。父親の存在が影を落とす点も共通する。

しかし、「瓦礫の死角」が北町貫多も全体の見渡す視点を備え、長篇の一部のような風情をたたえているのに対し、「病院裏に埋める」はアルバイト先にせよ、そこでの人間関係にせよ、あるいは貫多が胸ときめかす女子大生風の通行人にせよ、すべてがはかない夢のような存在。その夢を丁寧に念入りに、しかし、火花のようにぱっと呆気なく描き出すところに味がある。もちろんこれも著者の真骨頂だが、「瓦礫の死角」とはアプローチが違ふ。

とはいえ両篇とともに目につくのは、その結末部に見られる、力の抜き加減の

絶妙さだろう。このあたり、近年の著者は洗練をきわめる。かつてジェットコースターとも言われたアップダウンの激しさが、より微妙なトーンの上げ下げに引き継がれつつある。

つづく「四冊目の『根津権現裏』」は馴染みの古書店主新川が登場する「古書もの」だ。貫多の古書三昧はマニアックな次元に達し、独特な熱気を伝える。貫多という人物を理解するには、このこだわりこそが大事。ちなみにこの短篇では貫多に対し新川が、小説中に自分を登場させたことで文句を言う場面がある。風俗嬢にお金を貢ぐやや間抜けな人物として描かれたこともあって、新川は該当箇所を単行本の刊行時に削ってほしいと頼んでくる。こうした事例が生ずるのは作家の成功の副作用とも言えるが、作品の「外」が作中に混入する、メタ事例としてもおもしろい。

そんなメタ物語性が「崩折れるにはまだ早い」で逆方向に作用しているのは偶然だろうか。本作では「渠（かれ）」との語で言及される人物が主人公。彼は原稿の注文がこななくて汲々とする一方、ともに性病に悩まされる女性と同棲。やが

ながら「狂女」のようである。そして、父親に対して心底怯えているふうでこんなことを言う。「でもあの人は、カッとなると本当に怖いところがあるから……何をしだすか分からない怖さがあるから」「あの人は話を通じないとこがあるのよ。それで思いきったこととして、あとで泣いて後悔するような人なんだよ」。

むむ、と西村賢太の愛読者なら思うだろう。そうなのだ。貫多本人がそれを聞いて「何か、こちらに対する当てつけを言ってるのだろうか」と思うほど、父親と貫多は似ているのだ。

それにしても著者のこれまでの作品で、「——怖い。考えれば考えるほど、怖くてたまらない……」などという母親の陰気な吹きが描かれたことがあっただろうか。それに対する賢太の反応も「思えばあの母親も、つくづく不運である」などと、ひと味ちがう。何かが変わりつつある。もちろん描かれるのはあくまで十七歳の貫多。むしろ時間的には遡っている。変貌しているのは、作家の方なのだ。本短篇集では既発表作へのいわゆる「クロスレファレンス」も付され、作品

て彼女とも別れ、そんな中で最近死んだ知り合いのことを思う。ところが、その述懐が時空を越え、文体を変え、「渠」はいいつの間にか北町貫多憧れの藤澤清造と重なる。死んだ友人も、実は芥川龍之介や田山花袋だったという奇譚めいた展開となる。作品が「外」に侵犯されるのではなく、「内」に向かつて陥没していく。異色の作品だ。

「あとがき」にも注目したい。たった三頁だが、一篇の作品として読むに値する濃度がある。ここでは自身の作品群を読むための枠組みが著者によつて提示され、西村サーガの骨格がくつきりと浮かぶ。身体の頑健さと数々の失調とが隣り合わせなのも著者ならではの。「あとがき」によれば、「崩折れるにはまだ早い」の執筆にのめりこんでいたとき、白内障の悪化でほぼ片目だけの状態だったという。失明の危険さえあった。何しろ西村賢太だ。この事態もまた作品に結実させられるだろう。でも、くれぐれもお大事に。

（講談社刊・税別定価一五〇〇円）